

この指と一まれ (第 13 回)

若がえった大中里こども園に期待してください

大地保育を広めたい・・・それは子どもの幸せを願っての事

14 年前子どもたちの居場所になる園を目指して始まった大中里保育園。

でも希望や思いとは裏腹に厳しい現実からの始まりでした。

一番の難問は定員割れ。まずは保護者に大中里を選んで貰えること・・・

そこから始まってたくさんの不安の中でも「子どもの幸せを！！」

「そのための大地保育を知ってもらいたい」とそれだけの思いが私たちを動かしていました。

誠心誠意 熱意そして愛。

私たちの思いは半年後には定員充足という結果となって表れてきました。

それまでの数カ月間は職員を含めてただただ無我夢中。寝ても覚めてもとはよく言ったものです。

ベットに入っても明日は〇〇をするから覚えといて！！

あの遊具どこに配置したら子どもが自分から使うだろうね——

職員に話しておくことは？？うーんとやっぱり大人も楽しもうってことだね・・・

と夜の二人の会議は延々と続き夜が明けるのが早かったこと！！

子どもが幸せそうな顔をしていたら

大中里保育園は楽しいよといい笑顔で明日も園に行くことを喜んでくれたら

「今日ね登り棒上まで行けた」「砂場にみんなで大きなダム造ったよ」と満足そうだったら

きっとママやパパも安心してお仕事できるよね。そんなこんなの話題で盛り上がっていました。

大中里の子どもたちってとても仲良し。

喧嘩も良くするけど誰かとくっついてるしおしゃべりしてる。

そうそういつだって なんだってみんなと一緒にね。みんなでするって楽しいもんね。

大きな家族の一員だよ・・・が私たちのモットーでした。

園歌がなかった大中里の大事な歌は「世界に一つだけの花」。

どこでもよく行事には使われる BGM。でも私たちは生の声が届くように せかさないように

じっくり取り組めるようにと特に運動会は意識して音楽を使わなかったのですが

入園式も 卒園式も 発表会もみんなが集まるまで 始まる前の時間にはいつも

「世界に一つだけの花」を流しました。

そう一人一人が大事 1 人 1 人の花を咲かせよう どの花も美しい

私はそのままの私でいいんだと。

其々の個性を大事に それぞれが満足することを認めよう

だれもが一番輝くようにそっと見守ろう。それが私たちの「子どもの見かた」でしたから。



どこで 誰が どんなふうに 認めたり励ましを伝えると子どもに届くのだろう
子どもの意欲につながるのだろう とよくミーティングしました。

1人1人を見るっていうけど集団の中でそれができるのか？とても難しい問題です。
でもそこが大事。

お家 家族からヒントを得て父と母の存在をパートナー制という形で始めました。
じっくり相手をしたい子に向かい合うとき他の子ども達はもう一人が。

1対1で絵を描くときは他の子どもはもう一人が。

毎日一緒に過ごしているからこそ その必要性も子どもへの対応もすんなり理解し
お互いに協力しあえる子どもたちも違和感なく生活ができています。

毎年そんな自分達の保育を振り返るために 2月に絵画展を行ってきました。

一人一人に向かい合ってきた1人1人の順調な発達や成長を見て取れる子ども達の1年間の絵。
全員の子どもの絵を市民文化会館の小ホールに並べ0歳から6歳までの発達が絵から感じ取れる
のは私たち職員にもそして保護者にもいい時間となっています。

続けることの大切さと園外の方々に公開することの緊張感と誇りが私たちの励ましとなりより
いい保育につながっていると感じています。

子どもの発達を成長を次につなげるために子ども一人一人の1年間を思い起こし成長を
喜びながら 課題を見つけ保護者と共に話しあう時間は短いけど貴重なことです。

絵画展の中で行う職員の実践発表は誇りと自信につながる体験です。

毎年交代でテーマに沿って自分たちの保育・教育を文章にしてみる。それを発表する。
全員がそれを聞く。

自分たちの保育・教育をきちんと理解しおなじ方向を目指すために必要な事でした。
発表者だけでなく全員が同じ気持ちになる。「みんなだね」「他人ごとでなく次は私の番だよ」
だから人のすることをちゃんと見て感じておこうねと事あるごとに伝えてきてそれが
そこかしこで見られるのは嬉しいことです。

例えば5月泥んこが始まると乳児さんたちは担当と一緒に泥場に近寄って時々そっと
泥を触ってみたいり羨ましそうにじーと見ていては大人を振り返り「僕もやりたい！！」
の声なき声と一緒に見ている大人は「面白そう やってみたいねー。大きくなったら
そらグループになったら出来るんだよね」とつぶやいて共感する。

登り棒に挑戦する子どもを応援する声が聞こえ、その声に遊びの手を止めていつの間にか
みんなでの応援になったり 自分たちで育てた稲を幼児さんが脱穀を始めると小さい子が
やりたいと近づいてくるその小さな仲間に年長さんは大人が教えるよりわかりやすく
丁寧に教えたり・・・。

好きな遊びを自分で見つけて 自分で考えて試して 満足する。

と誰かが真似をしてどんどん遊びは広がって・・・。

あちこちでそんな遊びが展開されていくとき子どもの力のすばさ 想像力の豊かさ
無限に持つ子どもたちのパワーに圧倒されることもしばしば。



